

『神の慰めの書』におけるマイスター・エックハルトのカウンセリング

——ボエーティウスの『哲学の慰め』との比較において——

中 川 憲 次

はじめに

マイスター・エックハルトは、その著『神の慰めの書』を夫を失って悲しんでいるハンガリーの王女アグネスを慰めるべく書いたとされる。そこで、本稿においては、そこにおけるエックハルトの牧会カウンセリングともいえる在り方を探りたい。そのさい、われわれは、最後のローマ人といわれたデシデリウス・ボエーティウスが冤罪による獄中生活の直中においてもものした名著『哲学の慰め』における哲学婦人の在り方との比較において、エックハルトのあり方を検討したい。なお、カウンセリングというからには、カール・ロジャーズの心理療法を一瞥してから、論を進めたい。

1 カール・ロジャーズの心理療法

1.1 カール・ロジャーズについて

カール・ロジャーズの略歴を一瞥するとき興味深いのは、はじめウイスコンシン大学で農学を専攻しながら、途中で牧師を目指してユニオン神学校に入学している点である。更に興味深いのは、神学校での学びの最中に疑問を感じてコロンビア大学に転じて臨床心理学を学んだ点である。この略歴から浮かび上がるのは、ロジャーズが人を救いたいと願っていたということである。そのために神学校に入ったが、神学校の学びでは人は救えないとロジャーズは考えたに違いない。

1.2 ロジャーズの心理療法の主要点

ここではロジャーズの心理療法の主要点について河合隼雄監修の『臨床心理学 1 原論・理論』の第3章の基礎理論4から引用したい。「(ロジャーズの心理療法の)中心仮説は、人は自己の内部に自己理解、自己概念、基本的態度、自発的行動を変化させていく資質(実現傾向)を内在させている。それは人間関係の中で心理学的に定義可能な促進的態度が用意されると発現される。成長促進的雰囲気には、三つの条件が必要だとされている。しかもこの条件は、人間の心理的成長が目的とされるいかなる状況にも(セラピストとクライアント、親と子、リーダーとメンバー、教師と学生、医師と患者など)適用できると仮定されている。三条件とは、自己一致 (congruence)、無条件の肯定的関心 (unconditional positive regard)、

共感 (empathy) である。(中略) 1942年には非指示的技術を強調したが、1951年には技法よりセラピストの態度を強調し、1957年には『治療的人格変化のための必要十分条件』を発表して、学派を超えた仮説を設定し、リサーチを推進した」(1)。

ロジャーズの理論は、後に来談者中心療法といわれるようになり、更には、パーソンセンタード・アプローチと改名された。非指示的カウンセリングの段階では「繰り返し」や「感情の反射」や「明確化」などのカウンセラー技術が提唱されたが、単にマニュアル化されたオウム返しに墮する傾向が生じたため、カウンセラー自体の心的態度が問題にされるようになったという。われわれが本稿において注目したいのは、カウンセラーの態度として要求された、「自己一致」、「無条件の肯定的関心」、「共感」という三条件である。このロジャーズの考え方については、現在のカウンセリングの世界でほとんど常識の如く受け入れられているようだからである。

2 『哲学の慰め』(2) をめぐって

2.1 本稿における『哲学の慰め』の読み方

ボエーティウスは東ゴート王テオドリクスの治下(475-526) 宰相を務めた人物である。しかし彼は、東ローマ皇帝に通じてテオドリクスに謀反を企てたという嫌疑をかけられ、523年、死刑囚としてパヴィアの牢獄に入れられてしまう。処刑されたのは、翌524年である。この作品『哲学の慰め』は、その獄中で書かれたとされている。

ところで、ボエーティウスの獄中生活は冤罪によって惹き起されたものである。それは、韻文と散文を交互に置くというプロシメトラの体裁で書かれたこの作品の、第1部韻文第1章9行目に出てくる「禍 (まがつみ = malis inopina)」という言葉によって、容易に窺うことができる。この「禍 (まがつみ)」にボエーティウスが追いやられたいきさつについては、第1部散文第4章で説明される。曰く、「私は弱者という弱者の財産を襲おうとするコニガストスといかに屢々衝突したことでしよう王室管理人のトリグヴィラを、その始めつつあった——というよりはむしろ既に成し遂げた不正事から、いかに屢々引き戻したことでしよう。野蛮人たちのおおびらな貪欲と数限りない奸策とで悩まされている不幸な人民た

ちを、私の権威を賭していかに屢々護ってやったことでしょう！何人も私を正から不正へひきずり落とすことは出来ませんでした。私は地方人の財産が、或いは私的略奪に依り、或いは公的租税に依って亡びてゆくのを、その被害者たる地方人自身と同様に苦痛に感じたのです。

(中略)ところが、如何なる弾訴者に依って私は今日の打撃を受けたのでしょうか。それらの人々の中、先に王室の勤務を解かれたあのバシリウスは、ただ借金の苦しさに駆られて私を弾訴したのです。(中略)私はつまり、或る弾訴者が元老院を反逆罪に問う文書を提出しようとするのを妨げたという嫌疑を受けているのです」(3)。そして、決定的な言葉は次の如し。「今や私は、約五百里も遠く離れた所において、口を開くことも、抗弁することも叶わず、只元老院へあまり好意を持ちすぎたという理由で、死刑と追放とに宣告されたのです」(4)。

上記の如き冤罪による獄中で、死を待ちつつあったボエーティウスの心中は察するにあまりがある。そのような極限状況で、擬人法を駆使して、哲学婦人と死刑囚なる自分の対話という形で、このような完成度の高い作品をものしたということ自体、その執筆の事実そのものを、なお私に疑わせさえするほどである。もしこの作品が真にボエーティウスによるものであるならば、発狂さえず予測させる状況下で、ボエーティウスは自ら登場させた哲学婦人との対話という形の、自己内対話において、その窮境を何とか持ちこたえようとしたものと考えられる。その意味で本稿では、この哲学婦人とボエーティウスの対話を、死刑囚へのカウンセリングという観点で読むこととしたい。

2.2 哲学婦人のカウンセリングの方法

2.2.1 ボエーティウスの自己表白を促す哲学婦人

第1部散文第4章に登場後、哲学婦人はまず、「『つつまずお話し。心の内をお隠しでない』。若しお前が医者の手当てを期待するなら、先ずお前の傷をさらけ出さなくてはならぬ」(5)と言う。この言葉の中で「つつまずお話し。心の内をお隠しでない」という言葉は、ホメロス著『イーリアス』の第1巻363行に出てくる言葉の引用である。それはともかく、哲学婦人のこのような促しにしたがって、死刑囚ボエーティウスは件の冤罪にかけられた次第を詳しく語り始めるのである。

2.2.2 ボエーティウスの言葉に動揺せず、穏和な方法を用いる哲学婦人

第1部散文第5章には、上記の如きボエーティウスの冤罪についての訴えを静かに聴きつつも、決して動揺することのない哲学婦人の姿が次のように描写される。「私がこうした訴えをしたのに対し、彼女は静かな面差しを保って、私の嘆きに少しも動かされなかった」。そして哲学婦人は、「若しお前が追放されたのだと思われないのなら、むしろそれはお前自身がお前を追放したのだ」

(6)と、悩めるボエーティウスの肺腑を抉るような言葉を投げかける。ただその上で哲学婦人は、荒療治をしないと語る。同じ第1部散文第5章の末尾に曰く、「だが、おびただしい感情の嵐がお前の内に吹いており、苦痛、怒り、悲しみが散々にお前をひきずり廻しているから、現在のお前の精神状態を以ってしてはまだ強い薬を使うことが出来ない。だから私はしばらく、穏和な薬を用いることにする」(7)。

2.2.3 言葉の薬を処方する哲学婦人

第2部第3章の散文で哲学婦人との対話の結果「お言葉の響きが耳許から消え去るや、潜んでいた悲しみが心を暗くします」(8)と言うボエーティウスに対して、哲学婦人は言葉の薬を処方する。曰く、「確かにその通りであろう。あれはまだお前の病気の治療剤ではなく、いわば、今なお治療の邪魔になっているお前の苦悩の鎮静剤に過ぎないのだから。心の底まで沁み込む薬は適当な時になったら用いよう。それはともかく、お前は自分を不幸なものと思われたがってはならぬ。お前は一体お前の受けた幸福の数と程度とを忘れていたのだろうか」(9)。そして哲学婦人はかつてボエーティウスが味わったこの世の幸福の数々を数えあげた上で、言う。「若しお前が、当時喜ばしく思ったものが焼失したからといってそれだけの理由でお前自らを不幸だと思えば、それは不幸と思ふべき何らの理由にもならない。何となれば、今お前の悲しく思っているものもやがて過ぎ去るものだから」(10)。

ここには、傾聴しているだけでなく、ボエーティウスの心の中に一步踏み込んで、アドバイスする哲学婦人がいる。

更に、第3部の韻文第11章で、哲学婦人は、「思いを深く真理探求に致す者は、また岐路に迷うことを欲しない者は、心眼の光を自己自らの中に向けよ(11)」と、言葉の薬を処方する。

2.2.4 摂理について語る哲学婦人

心の目を自らの内に向けた人間は、何を見出すべきであろうか。それは神の摂理であると、哲学婦人は言うのである。よって、第4部から第5部にかけて、哲学婦人の説くところは神の摂理にきままる。すなわち、第4部散文第6章に曰く、「万物の発生、可変的事物のあらゆる進展、及びすべての種類の運動は、その原因・秩序及び形相(Forma)を神の精神の不易性から受取る。この精神は、自らの単一性の城壁の中に在って、事物支配に対する多種多様の様式を設定した。この様式が、神の叡智の純粋性、それ自らに於て考えらるる時には摂理(providentia)と名づけられる」(12)。次に第5部散文第6章に曰く、「若しお前にして、神が依って以て万物を認識するあの現在の知識を理解しようと欲するなら、お前はそれを、未来の事などに関する予知としてではな

く、決して過ぎ去らぬ現在に関する知識として解するのがより正しいであろう。この故に神の現在の知識は予見 (praevidentia) とよりはむしろ〔摂理〕 (providentia) と呼ばれるのである、すなわち、下界の事物から遙か遠くにい乍ら、万物をいわばその最頂点から眺め渡すが故に」(13)。最後に、これも第5部散文第6章に曰く、「ところで、お前はと言うであろうか。お前の意向に依って神的知識が変化し、かくてお前が或いはこのことを、或いはかのことを欲するにつれて、神も亦その認識を変えるように思えるであろうか。だがそういうことは決してあり得ない。神的洞察は一切の未来的事柄に先廻りしており、之を自らの認識の現在性へひき向け、ひきもどすのである。そしてそれは、お前の想像するように、或いはこのことを予知し、或いはかのことを予知するといったような変り方することなく、却って、自らは不動に止まり乍ら、その一瞥を以て、お前のあらゆる変化に先行し、且つそれを包括するのである」(14)。この最後の引用には「摂理」という言葉は出てこないが、「神的知識」「神的洞察」という言葉がそれに当たることは言うまでもない。

3 エックハルトの『神の慰めの書』に見る カウンセリング

3.1 『神の慰めの書』について

本書は、1301年に夫を失い、その7年後には父が暗殺され、更にその3年後には母を失うという不幸に見舞われた、ハンガリーの王女アグネスを慰めるべく書かれたとされる。この点について、上田閑照氏はそのように推定しているが(15)、川崎幸夫氏は本書がハンガリーの王女アグネスに捧げられたというのは伝説であろうと言う(16)。以上の如き成立事情にある『神の慰めの書』であるが、その内容は説教といってもよいものである。よって、『哲学の慰め』におけるような対話はない。エックハルトは、いきなりアドヴァイスするのである。

3.2 『神の慰めの書』におけるアドヴァイス

この書の序の部分で、エックハルトはまず、人を襲う3種類の艱難があるとして、「第一は、物質的な損害によるもの、第二は、自分の血縁や友人に降りかかった被害、第三は、自分自身に起きた、侮辱、不快、身体の痛み、心の悩みなどの被害である」(17)と言う。次に第1部でエックハルトは「よい人」を登場させ、この「よい人」とは、「善である限り、造られたり、創造された、ものではなく、善性そのものから生まれた子供であり、息子である」(18)と言う。これはエックハルトに特有の、私たち個々人の心の直中における御子イエス・キリストの誕生を念頭において語られた言葉である。そして、このような「よい人」は「外部の禍に襲われても、彼の心は平静で、平安で、動じない」(19)、とエックハルト

は言う。

第2部では、苦しむ人を慰める30の話題と教えが述べられる。その中のいくつかを紹介しよう。ボエーティウスは摂理について語っていたが、それと同じ事柄をエックハルトは「神の意志」として語っている。曰く、「どのようなことであれ、そうなるのが神の意志である限り、よい人の意志は神の意志とまったく一つになり、合一されなければならないので、それが自分の禍でも、いや、自分が地獄に落ちようと、人は神とともに同じことを望まねばならない」(20)。また曰く、「恩恵と善をもつならば、いかなる時も、どのような状況におかれても、過不足なく、完全に慰められ、満足するが、もしこれをもたなければ、私は神のために、神の意志において、それなしで済まされなければならない。私が切に求めるものを神が与える意志があるなら、私はそれを所有し、歓喜にひたるのである。もし、神が与える意志がないならば、神が与えたくないという、神の意思に従い、それを所有しないことを受けるのであり、このように、私は、受け取ることによってではなく、無しで済ますことによって受けるのである」(21)。以上は、主に「物質的な損害による」艱難に対する言葉であった。

では、「自分自身に起きた、侮辱、不快、身体の痛み、心の悩みなどの被害」に対する言葉を見てみよう。エックハルトは、そんな場合に「友人がともに苦しんでくれるなら、当然、この苦しみは減少する」(22)と言う。その上でエックハルトは、「神のあわれみはこれよりいく倍も私を慰めるであろう」(23)とも言うのである。そして決定的な言葉が登場する。曰く、「私が苦しむより前に神が苦しんでいて、私も神のために苦しむとすれば、私のすべての苦しみは、どんなに大きく、どんなに多様であろうと、慰め、喜びに変わることは容易なことである」(24)。更に言う、「よい人が神のために苦しむことはみな神のうちで苦しむことである。神は彼が苦しむとき彼とともに苦しむのである。私の苦しみが神のうちであり、神がともに苦しむのならば(Ist min liden in gote und mitlidet got.)、苦しみが苦痛を失い、私の苦悩は神のうちであり、私の苦悩は神であるとき、どうして苦しみは私にとって苦悩だと言えようか」(25)。そして決定的なことが言われる。「これほど多い益があり、恵みがあるのだから、このように神のために苦しみなさい」(26)。こうして、第2部はほとんど終わる。「よい人」の実例集である第3部は省略する。

4 『哲学の慰め』と『神の慰めの書』の アドヴァイスにおける共通概念

『哲学の慰め』と『神の慰めの書』のアドヴァイスに共通する概念は、まず「苦」である。エックハルトは「(苦には)これほど多い益があり、恵みがあるのだから、このように神のために苦しみなさい」とまで言っていた。

この点について、『哲学の慰め』の哲学婦人は、まだ引用していなかったが、第2部散文第8章で次のようなことを言っている。曰く、「幸運はその阿諛を以て人間を真の善から迷い外れさすが、不幸は人間を、多くの場合力づくで真の善へと引きもどす。又お前は、この厳しい、この恐ろしい不幸が、お前に忠実な友人達の心を知らせてくれたことを、ごくつまらぬ事柄と考えるであろうか。不幸はお前に、確実な友と疑わしい友とを区別してくれ、幸運のある所にのみ集る友と一緒に拉し去り、真のお前の友だけを後に残してくれた。傷つかない前のお前だったら、又自らを幸福と思っている時のお前だったら、どんなに高い値でこの認識を購ったことであろう！今お前は富の喪失をさえ嘆いている。だがお前は最も高貴な財宝——友——を発見したではないか」(27)。これを読むと、「ハァー落ちぶれて 袖に涙のかかるとき 人の心の奥ぞ知る／朝日を拝む人あれど 夕日を拝む人はない サノサ」という「申木野さのさ」の一節が思い出される。それはともかく、哲学婦人は、ここで、不幸という名の苦悩の功績を語っていたのである。その上で、哲学婦人は第4部、第5部の「神の現在の知識は摂理である」という真理に従うように、悩める死刑囚を導いていたのである。

こうして、『哲学の慰め』と『神の慰めの書』のアドヴァイスに共通するもう一つ概念は「摂理」すなわち「神の意志」である。「苦」を積極的に評価すると同時に、エックハルトもまた「神の意志」を強調していた。エックハルトは、「もし、神が与える意志がないならば、神が与えたくないという、神の意思に従い、それを所有しないことを受けるのであり、このように、私は、受け取ることによってではなく、無しで済ますことによって受けるのである」と言って、徹底的に神の意志に従うように促していたのである。

ただ、エックハルトがボエーティウスと決定的に違う点もあった。それは、なお、「苦」の認識に関してである。ボエーティウスの哲学婦人の言う不幸という名の苦の功績は、われわれが戯れに引いた「申木野さのさ」の「落ちぶれて袖に涙のかかるとき 人の心の奥ぞ知る」という言葉に尽きる程度のものであった。しかし、エックハルトは「神の共苦 (mitliden)」について語っていたのである。『哲学の慰め』の哲学婦人は、mitlidenのこの上なき力を知らない。ボエーティウスの神は、ただ摂理の神であるだけであった。人はその摂理を認識し、たとえば冤罪による死刑という不幸を摂理として従容として受けよと、哲学婦人は言うのであった。哲学婦人は最後に命じている。「悪徳を避け、徳を育み、心を正しき希望へ高め、敬虔な祈りを天に献げよ」(28)と。

一方エックハルトの「神の共苦」に関する認識は、苦が真の友と偽の友の区別をさせてくれる、という程度のもではなかった。「神の共苦」は、人をして「喜んで苦しむ」ところまで連れてゆくということを、エックハ

ルトは知っていたのである。

5 カウンセラーとしての哲学婦人とエックハルト

ロジャーズのカウンセリング理論に照らすとき、ボエーティウスの分身であった哲学婦人は、「自己一致」してはいた。しかし悩める冤罪の死刑囚に対して「無条件の肯定的関心」も、「共感」も結局は示してはいなかった。哲学婦人は、悩める者の誤りを訂正し、己が信じる真理へと導こうとしていた。エックハルトはどうかと言えば、彼もまた「自己一致」はしていたが、一見すると、その書の読者に対する「無条件の肯定的関心」も、「共感」も示してはいなかった。彼もまた、己が信じるところを説き切っている。しかし、エックハルトには「共感」は存在したと言えよう。それは、外でもない、「神の共苦」についての言説から窺えるのである。悩める者への「共感」なくして、「友の共苦」から「神の共苦」へと論を進めることはありえないからである。

結論

われわれは、『哲学の慰め』における哲学婦人のカウンセリングは、順を踏んでいて、まず悩める者に語らせて、事柄を納得させてから教えるという、一見、妥当なものだと考えていた。しかし、これは当然のことであるが、『哲学の慰め』は擬似カウンセリングの書であって、結局はボエーティウスが己が思想を手の込んだ対話編で示しているに過ぎなかった。敢えて言うなら、ボエーティウスは、『哲学の慰め』全体を通して読者をカウンセリングしていると言えよう。その点では、エックハルトが『神の慰めの書』で行ったことと同じことをボエーティウスもしているのである。こうなると、夫々の書の中で語られていた言葉自体が、決定的に問題になってくる。その中に、苦悩する者が自立するのに助けとなる言葉があったかどうかということである。換言すれば、一方的に投げかけていながら、なお動的な対話を喚起するような言葉があったかどうかである。『哲学の慰め』には、残念ながらそのような言葉は見当たらなかった。そこには、真理然とした言葉の羅列があるだけであった。

他方、エックハルトの「共苦 (mitliden)」という言葉は動的であったと言えよう。エックハルトは苦を思むべきものとして見ていなかった。エックハルトは苦の副次的功績などを語りはしなかった。苦はそのまま楽なのであった。エックハルトの逆説的言説は、苦をめぐって冴え渡っていた。

本稿の冒頭でわれわれは「エックハルトの牧会カウンセリングともいえる在り方を探りたい」と書いた。ロジャーズは牧師の道を敢えて途中でやめて、カウンセラーとなった。そして、彼が見出したのは「非指示」と

いう方法であった。それは一見して宗教の方法とは違うように見える。宗教は指示するのである。しかし、そのように宗教を拒否したかに見えるロジャーズが辿りついた方法の一つである「共感」は、極めて宗教的な方法に思われる。奇しくも、エックハルトはその「共感」を説き難きを説く説教的言辞を駆使する中で、「共苦(mitliden)」という言葉にして発したのである。何故このような言葉をエックハルトは語る事が出来たのであろうか。そう言えば、エックハルトは神の共苦という前に、友の共苦を語っていた。その上で、神の共苦は友の共苦の幾倍もであろうと、論を進めていた。人の共苦の力をエックハルトは知っていたのである。エックハルト自身が、日々出会う人々と共苦していなければ、こんな言葉を思いつくはずがないのである。『神の慰めの書』の成立年代は諸説があって定かでないが、エックハルトのシュトラスブルク時代であることだけは定説となっている。シュトラスブルクはエックハルトがはじめてベギンと出会った都市である。ベギンとは正規の修道女になれず、不安定な立場で半聖半俗の日々を送っていた女性達のことである。彼女らは、シュトラスブルクのドミニコ会修道院で指導者として説教をしていたエックハルトの聴講生であったと思われる。不安定な立場にあって苦悩していた女性達との牧会的交わりの中で、エックハルトの共苦の思想は育まれたものとわれわれは考える。

現代の非宗教的カウンセラーは、ロジャーズの教えの延長線上で、「自己一致」、「無条件の肯定的関心」、「共感」という条件を遵守しつつカウンセリングの実践に励むことであろう。その際、どのようにして「自己一致」に至っているであろうか。「自己一致」もまた、欠くことの出来ない要素であり、決してそう簡単に形成できるものではないからである。ポエティウスの場合この「自己一致」は、哲学の学びの成就によって形成されていた。ただ、「無条件の肯定的関心」、「共感」という条件は全く満たされていなかった。エックハルトの場合、「自己一致」はイエス・キリストを信じる信仰、それも自分の中にイエス・キリストが誕生するという信仰によって、形成されていた。そして悩める者への「無条件の肯定的関心」、「共感」も、ベギンをはじめとした具体的な社会的弱者との交わりを通して形成されていた。現代の非宗教的カウンセラーは、そのような「自己一致」をどのようにして形成するのであろうか。それは、多分、エックハルトの場合と同じく、苦悩する人々との全身全霊における交わりを通して形成されていくのではないか。エックハルトはキリスト教信仰によって「自己一致」していたと先程書いた。しかし、エックハルトの説教をはじめとする宗教的言説は、苦悩する人々との交わりの中で、時々刻々、微妙に変化しているのである。すなわち、エックハルトの「自己一致」は、その生涯を通じて変化しつづけたのである。これは、誰の場合でも当然のことであろう。しかしその変化の中で、常に船の錨のようにエッ

クハルトを護りつづけたものがある。それが、エックハルトにとっての宗教であった。それがエックハルトの中で常に生まれつづけたイエス・キリストであった。エックハルトは、このような消息において、稀代の牧会カウンセラーであったとわれわれは結論したい。

最後に、以上の結論から現代の非宗教的カウンセラーに提言出来ることがあるであろう。ロジャーズは「自己一致」していない者はカウンセリングすべからずと言うかもしれないが、完全な「自己一致」など、どこまでいってもありえなからう。人は生きる限り未完成である。よって「自己一致」は、常に未完成な「自己一致」である。この「自己一致」を育ててくれるのは、「無条件の肯定的関心」と「共感」というカウンセラーの態度によって出現するクライアントとカウンセラーの間の全人格的交わりであろう。「無条件の肯定的関心」と「共感」という在り方が、クライアントとカウンセラーの間に「共苦(mitliden)」的交わりを生み、その交わりの中でカウンセラー自身がこの上なく大切な何ものかを学び取り、その「自己一致」は深められ、育てられる。自分を完成的に「自己一致」した存在としてクライアントに向かうカウンセラーの「自己一致」は、育つことはないであろう。そこには、信仰的に自分を完成した者だとして、信徒に向かう牧師の場合との並行現象がある。そのような牧師の信仰が育たないであろうことは、言うまでもない。

註

- 1 河合隼雄監修、山中康裕、森野礼一、村山正治編、岡田康伸 [ほか] 執筆『臨床心理学1 原理・理論』、創元社、1995年、131頁-132頁。
- 2 原典は以下の如し。Boethius: the theological tractates / with an English translation by H. F. Stewart and E. K. Rand. The consolation of philosophy / with the English translation of I. T.; revised by H. F. Stewart. --Heineman n, 1973. (The Loeb classical library 74). 訳文は次の翻訳書を用いた。ポエティウス著、畠中尚志訳『哲学の慰め』、岩波書店、1984年。
- 3 ポエティウス著、畠中尚志訳『哲学の慰め』、岩波書店、1984年、22頁-24頁。
- 4 同上、27頁。
- 5 同上、21頁。
- 6 同上、33頁。
- 7 同上、35頁。
- 8 同上、52頁。
- 9 同上、52頁-53頁。
- 10 同上、54頁。
- 11 同上、137頁。
- 12 同上、183頁。
- 13 同上、231頁。原文は以下の如し。Itaque si praesentiam pensare velis qua cuncta dinoscit, non esse praesentiam quasi futuri sed scientiam numquam deficientis instantiae rectius aestimabis; unde non praeventia sed providential potius dicitur, quod porro ab rebus infimis constituta quasi ab excelso rerum cacumine cuncta prospiciat.
- 14 同上、235頁。
- 15 上田閑照著『マイスター・エックハルト(人類の知的遺産)』

- 21)』、講談社、1983年、135頁。
- 16 マイスター・エックハルト著、川崎幸夫訳『エックハルト論述集（ドイツ神秘主義叢書3）』、創文社、1991年、290頁。
- 17 原典は以下の如し。Meister Eckhart: Die Deutschen Werke. Band 5. Deutschen und lateinischen Werke, W. Kohlhammer Verlag, 1987. 訳文は以下の書物を参考にした。マイスター・エックハルト著、植田兼義訳『キリスト教神秘主義著作集6』、教文館、1989年、329頁。
- 18 同上、330頁。
- 19 同上、333頁。
- 20 同上、338頁。
- 21 同上、340頁。
- 22 同上、362頁。
- 23 同上、362頁。
- 24 同上。
- 25 同上、363頁-364頁。原文全体は以下の如し。allez, daz der guote mensche lidet durch got, daz lidet er in gote, und got ist mit im lidende in sinem lidenne. Ist min liden in gote und mitlidet got, wie mac mir danne liden leit gesln, so min leit in gote ist und min leit got ist?
- 26 同上、364頁。
- 27 ボエティウス著、畠中尚志訳、前掲書、82頁。
- 28 同上、236頁。